

誰が医者になるのか

—医学部における選抜システムと文化的再生産についての考察—

中川 さおり (お茶の水女子大学大学院)

1. 問題背景

本発表は、近年の医学部入試において急速な拡大を果たした中高一貫校出身者の占める割合の高さについて、その実像を明らかにすることを目指したものである。これらを明らかにすることは、単なる専門職養成課程のあり方の検討に留まるだけではない。社会階層・地位の分配という立場から、それは主に3つの問題を内包しているのである。一つは文化的・経済的要因、二つめは地域差の問題、そして最後がトラッキングの問題である。そして発表者が特に注目したいのは、トラッキングの問題である。

近年の医学部志願者には、かなり早期の段階から医学部を目指す傾向があり、これらのトラッキングが高校入学以前、つまり中学入学時点で起こっている可能性が見受けられるためである。

そこで、本発表では以下の問いに対して、分析、検討を行いたい。

①学部選択の段階で将来の職業選択が決定すると言っても過言でない医学部を、彼らはどのような理由で選んでいるのか。

②何故、国公立・私立を問わず医学部には中高一貫校出身者の占めるウエイトが高いのか。中堅の私立大学については、難易度からして公立高校出身者も十分に参入する余地があるはずである。

③医学部入試という切り口から見たとき、90年を境に取り込まれた「多様な入試選抜」の一環としての「面接入試」や「小論文」等の導入が、いかなる帰結をもたらしたのか。

実際にこれらの試験がどのように行われており、合否に占めるウエイトはどの程度なのか、検討する必要がある。

2. 分析枠組み

上記の問題設定に基づき、本研究で追求したい問いは、医学部合格者に占める中高一貫校出身者割合が拡大している背景である。すなわち、本研究では、

①「医学部入試システムの変容(多様な入試の導入)」と②「医学部志願者層の変化(中高一貫校への移動)」の2点の関係について、ブルデューら(1970ほか)の文化的再生産の枠組みを用いて分析を行う。とりわけ注目すべきは、二次試験で課される「面接試験」である。「面接試験」は学科試験と同様に高いウエイトを占めており、これらがどのように行われているか、メリトクラシーと文化資本の蓄積という側面も合わせて分析する。

3. 調査方法

本調査では、①1981年～2005年までの国公立・私立大学医学部に入学した学生の出身校がどのように変遷しているかの検討と、②医学生へのインタビュー調査とアンケート調査の双方を通じて得られた回答の分析を行う。

<調査概要>

①1981年～2005年までの、国立9大学・私立大学3大学の合格者出身高校の推移

②首都圏私立大学医学部の学生50名への質問紙調査、西日本地区の国立大学医学部・首都圏の私立大学医学部に在籍する医学生・大学病院に勤務する医師(研修医を含む)・教員計23名へのインタビュー調査：調査時期は2005年4月～12月。

調査内容は、医師を目指した動機や家庭背景に加え、医学部入学までの習い事等や中学受験の有無などである。本研究では面接試験時でのやりとりに加え、特に医学部入学までの習い事等の文化的要素に注目した。

4. 調査結果

1) 医学部シフト

国公立・私立大学ともに中高一貫校のウエイトが高くなりつつあるのは、90年代前半以降の現象である。

＜国立大医学部合格者出身校上位8位に占める出身校推移＞			
	国立高校	公立高校	私立高校
1981	5.5%	72.2%	22.2%
1990	8.3%	52.7%	38.3%
1998	6.9%	34.7%	58.3%
2005	4.1%	12.5%	83.3%

※各大学上位8位までの高校の集計結果。全体数ではない。

この背景には、①90年以降、ほとんどの医学部が多様な入試選抜を導入し始め、単純な学力試験のみでは合否が判断できなくなったこと、②大都市を中心とした中高一貫校進学者の増加③さらに、医学部進学を希望した生徒が、効率よくカリキュラムが組まれた中高一貫校に移動しはじめていることが挙げられる。

これらの側面は、医学部に合格者を出したいと考えている高校側の意志が中高一貫校の拡大傾向に拍車をかけている可能性が指摘できる。

2) 多様な入試選抜

2003年までに、わが国の大学医学部・医科大学において、国公立大学43校中42校が、私立においては29校中26校の大学で、入試選抜時に面接試験を取り入れている。どの大学にも共通なのは、面接が最終的な合否に重要なウエイトを占めているということである。これらの背景には、80年代までの受験戦争の過熱が、結果として医師になりたいという学生よりも偏差値の高さから医学部を目指す学生が増えたことが問題視されたことによる。90年を境に取り込まれた推薦入試や「コミュニケーション能力」等への重視も、こうした反省から来たものである。

「多様な人材を集めたい」という医学部側のニーズが、次第にメリトクラシーから脱却していったと言えよう。

しかし結果として「面接試験」等の多様な入試制度の導入により、医学部は「情報戦」（医学部3年）と呼ばれるほど、学力以外のウエイトが大きくなった。そのため、学力試験では見えにくい資質や出身階層が、面接試験という曖昧な選抜により、一層出身階層や資質を助長した結果になっている可能性がある。すなわち、医学部志願者には、学力+文化資本の2つの側面が求められるはじめている。

インタビューでは、現場の教員ですら医学部入試の多様性が個人の努力だけでは戦えないものと認知

していた。学力以外での要素が高いウエイトで求められることは非常に興味深い点である。

3) 医学部進学への動機

調査から、医学部に進学するような学生の進路選択の背景には、将来特にやりたいことや、なりたい職業を見つけられない代わりに、手堅い医学部を選択し始めている傾向がみられた。

インタビュー調査からも読み取れるように、「レールの医学部の存在」（医学部5年）は、将来確実に雇用を手にできる、まさに一貫校と同じような安定と安心を享受できる進路先として選択されはじめている。

5. まとめ

本研究での知見は以下にまとめられる。

1) 国公立・私立を問わず医学部に合格するためには、文化資本の蓄積+経済力+早期からの選抜参加が求められ、機会の不平等の可能性が懸念される。本当に適した人が排除されていくメカニズムが働く可能性である。全体的に医学部生にきわめて高い文化資本の蓄積がみられたことと合わせ、検討の余地があるだろう。

2) 上位一貫校だけでなく、中堅の中高一貫校出身者の多くが医学部に進学する傾向があり、この背景には、地位安定の手段として、きわめて強いペアレントクラシー（Brown,1990）が働いている可能性が見いだされた。つまり、医学部進学者の背後には、多かれ少なかれ親の意志が働いているということである。

これらの動向は、近年医学部志願者が中高一貫校に集中するようになったことで、ある走路が社会的地位達成過程まで拡張していく可能性（「社会的・教育的トラッキング」藤田、1980）と合わせて考察する必要がある。

すなわち、現代の医学部進学は中高一貫校の入り口段階の中学受験から始まり、「家庭環境」と、「親の取り組み」が重要な役割を担っているといえる。

以上に見てきたとおり、これらの選択行動はある種の再生産戦略といえ、親の努力の関数が、子どもの教育達成にどのような差異化をもたらしているのか、今後さらに詳しく検討する必要がある。

※引用文献等の書籍情報、データの出典等につきましては、当日配布いたします。